ペットとともに

子犬・子猫の販売時期

「生後8週」実現へ変わる風向き

幼すぎる子犬・子猫の販売を禁じるいわゆる「8週齢規制」。これまでペット関連業界の反対で実現してこなかったが、今年になって販売大手のコジマが自主規制に踏み切り、風向きが変わりつつある。

販売大手 先取り導入で一石

「生後8週（57日）以降の引き渡しを推奨します」

今年1月、ペット販売大手のコジマが、子犬・子猫の販売時期について新しい見解をホームページや店頭で公表し、注目を集めた。

動物愛護法は本則で生後56日（8週齢）を超えるまで子犬・子猫の販売を禁じているが、実際には付則により、49日（7週齢）を超えれば販売できる。このためペットショップと取引する繁殖業者のほとんどが、生後50日で子犬・子猫を出荷しているのが実態だ。

こうした中でコジマは、8週齢になるまでは、専属獣医師や販売スタッフの手元におき、その後に販売することにした。8週齢規制を先取りするものだ。

8週齢規制は欧米先進国の多くで導入されている。この頃まで、幼い犬猫を生まれた環境で母親やきょうだい、人間にふれあわせ、家庭犬・家庭猫として適切に「社会化」することが成長後の問題行動を予防し、また、免疫力を高めてから出荷・販売することで感染症のリスクを減らすと考えられているからだ。だが日本では、少しでも幼いうちに販売する方が「かわいい」とされ売りやすく、飼育コストも抑えられるため、ペット関連の業界団体が導入に反対してきた。

コジマの取り組みは、この状況に一石を投じた。川畑剛社長は、「親元に8週齢までいた方が問題行動が少なくなるという論文や文献が海外で多数出ている。また7週齢は、免疫が不安定な時期にあたることも確か」と話す。本来は8週齢まで生まれた環境で育てるのがベストだが、繁殖業者が幼いうちに出荷する現状のなか、「せめてできる範囲で社会化し、免疫的に問題のない状態にして販売しようと考えた。それが販売者責任だと思う」と言う。

出荷前の柴犬（しばいぬ）の子犬たち。この繁殖業者は社会化期を考慮し「早くても生後60日までは販売しない」という

業界、獣医師会も姿勢一転

ほかの販売大手も同様の姿勢を示し始めている。

全国で約100店を展開するAHBの川口雅章社長は、「本来、社会化期を大切にする方向に向かうべきだ」。全国約80店のペッツファーストも「もちろん8週齢規制のほうがいい」（正宗伸麻社長）。同社は取引がある繁殖業者に対し、8週齢以降での出荷を促す交渉を始めつつある。

こうした中で、販売業者らで作る全国ペット協会も、最近になって8週齢規制に賛成の立場に転じた。販売業以外の業界関係者にも、変化が起こっている。

年初に開かれた業界団体の賀詞交歓会では、日本獣医師会の境政人専務理事のあいさつが話題になった。日本獣医師会はこれまで規制強化に消極的な姿勢を示してきたが、容認する発言をしたのだ。境氏は「『49日』は法律上の経過措置で、本則の『56日』に当然なる。感染症予防の観点からも、8週齢でワクチン接種をし、免疫力を高めた『完璧な商品』として出荷するのがプロの仕事」と話す。

別の団体の幹部は「消費者が8週齢以降の販売のほうがいいと考えるようになった。むしろ業界側から、8週齢規制にしてもらうよう要望する時期にきている」と背景を説明する。飼育コストの上昇を十分に吸収できる市場環境にあることも、後押ししている。

こうした動きも追い風に、超党派の議員連盟が今国会での動物愛護法改正で、付則の削除を目指している。19日には俳優の浅田美代子さんやミュージシャンの世良公則さんらが中心となって、衆院第1議員会館で集会を開いた。登壇した超党派議連のプロジェクトチーム座長、牧原秀樹・衆院議員は「法の本則である『56日』にきちんとしようということで、全力を尽くす」と話した。（太田匡彦）

コラム 遠い目をした猫

映画監督・犬童一心

出待ち姿 いとおしすぎて

何年か前に、寝室のドアに猫扉をつけた。

うちの猫たちは年をとって、2匹とも随分と愛想がよくなり、寂しがり屋になった。だからなのか、季節と関係なく夜は部屋に入ってくることが多くなった。もともとは冬は寒いから、妻の布団に潜り込みたくやって来ていたのだが、今は季節は関係ない。寂しかったり、つまんなかったり、でやってくる。

ここはやっぱり猫扉の出番かなとなった。それまでは、いつでも入って来られるようにと戸を薄く開けていた。だが、2匹が出入りすると開けっぱなしになり、冬は温度が下がり、夏は湿気を含んだ高温の空気が部屋へと攻め込む。

猫扉は、もともとあった戸をくりぬいて、そこに扉をつける。つけてみると、何かその存在がとても可愛く、戸の全体にも妙に親しみを感じるようになった。

扉をくぐるとそのあと勢いよく戻ってくるので、猫たちは最初、それを怖がった。三毛のチャッピーはすぐに慣れたが、アメショーのグーグーはひたすら怖がってくぐれるようにならない。夫婦で戸を挟んで、怖くないんだと猫扉を開いて見せたり、グーグーを廊下に置いて中からひたすら名前を呼んだりしたが、ビビって入れない。小さい頃、床に何か落ちていたりすると、驚いて、急に跳ね上がったりしていたが、やはり小心は簡単になおらない。

だからグーグーは、夜、寝室に入りたくなるといつまでも戸の前で出待ちだ。夫婦のどちらかがトイレに行ったり、早く起きたりで開いたチャンスを待つしかなくなった。おなかがすくと、そのアピールで鳴くが、意外とただじっと待っていたりもする。夜中に起きて開けた時、じっとたたずむグーグーを見つけ、いとおしさマックスになると同時に心が痛んだ。

結局、夜寝る時、戸を薄く開くようになった。元の木阿弥だ。猫扉はその意義を失ってしまった。でも、後悔はない。心を和ませてくれるから。写真は、お風呂の扉前で出待ちするグーグー。開けてあげないよ。

曇った扉の向こうで出待ち中のグーグー

診察室から

山根義久さん（倉吉動物医療センター会長）

Q 雄のコーギー。前脚の両脇が赤くただれています

雄のコーギーを飼っています。1年ほど前から前脚の両脇が赤くただれるようになりました。動物病院で診療を受けていますが症状は一進一退で、むしろただれた範囲が広がっています。（三重県・男性）

A 内分泌系の病気の可能性 血液検査を

犬で皮膚に異常が見られる場合、まずは細菌や真菌の感染、ノミやダニなどの寄生虫、食物アレルギーなどが考えられます。特に激しくかゆがっている時には、これらの要因を検討するといいでしょう。

一方で今回の相談のように、左右対称に患部がある場合には、内分泌系の疾患の可能性があります。代表的なのが、甲状腺機能低下症です。

この病気になると左右対称に脱毛し、毛が抜けたあとの皮膚は黒ずんだり、フケが見られたりします。犬によっては抜け毛が気になってその部分をしつこくなめたり、ひっかいたりし、そのうちに菌が増殖して赤くはれるようなこともあります。ほかにも、元気がなくなるなどの症状が見られるケースもあります。

多くは、甲状腺ホルモン製剤を与えることで改善していきます。ただ、生涯にわたってホルモン製剤の投与が必要な病気です。

もう一つ、副腎皮質機能亢進症もあり得ます。やはり左右対称の脱毛が見られ、脱毛部分にはかゆみが伴います。おなかがふくらんだり、皮膚が薄くなったり、黒ずんだりするような症状も特徴的です。治療は一般的に、投薬によって行います。皮膚の状態がよくなるまでに、3～6カ月かかります。

これらの病気は血液検査で診断することになります。まずは動物病院で症状をよく説明し、しっかりと検査を受けるようにしてください。

やまね・よしひさ 1943年生まれ。東京農工大名誉教授。

◆「診察室から」への質問を募集します。住所・氏名・年齢・電話番号を書いて、メール（seikatsu@asahi.com）でお寄せください。

sippo

投稿された写真

動物病院に連れて行くのが大変な猫の受診機会を増やし、健康で長寿になってほしい。そんな願いで2017年秋にsippoが始めた「ネコも動物病院プロジェクト」。動物病院に行った愛猫の写真をインスタグラムで募集し、優秀作を表彰しています。

同時に飼い主のいない猫の保護活動にも役立てようと、写真投稿1件につき100円を公益社団法人「アニマル・ドネーション」を通じて保護団体に寄付しています。今年度は前年度を上回る2377件の投稿が集まり、計23万7700円を寄付しました。

ハッシュタグ「＃ネコも病院」を付けて、病院内かキャリーケースに入った写真をインスタグラムで投稿してください。投稿が猫たちの幸せにつながります。

sippo 検索